

冠婚班概要

土居 浩

冠婚班の初年度報告について、それぞれの概要を示す。

問芝志保「子供の名づけにおける姓名判断の利用—インターネット調査から」では、インターネット調査に基づき、現代日本における名づけで姓名判断がどれほど影響力をもっているかを明らかにする。前提として、姓名判断の歴史が概観され、現代に連なる姓名判断が明治中期に誕生し、明治末期から関連書物が刊行され、昭和初期には広く普及したことが確認される。次に、第一子の名づけに関するインターネット調査結果が分析され、第一子の名づけに最も重視したのは誰の意見か、名づけの際に姓名判断を参照したか、名づけの際に何を重視したか（漢字の意味／音の響き／画数／親先祖との名前のつながり／生まれた日付などとのつながり）の回答結果から、回答者の年代での相違が明らかにされる。50代を境に、親が30代～50代では姓名判断を参照する割合が高いが、画数を調べても必ずしも重視してはいないことが指摘される。

田口祐子「乳児期における新しい人生儀礼とメディア—ニューボーンフォトとハーフバースデーを例として」では、副題が示すように、ニューボーンフォト（新生児期の写真撮影）と、ハーフバースデー（生後6か月の祝い）という、いずれも生後1年に満たない乳児期における新しい人生儀礼の内容と動向が報告される。これら新しい儀礼の発祥地は欧米圏にあることが確認され、日本でどれほど浸透しているかの現状報告である。ニューボーンフォトについては、生後間もない新生児にポーズをとらせることへの不安視から、関係業者が独自ガイドラインを示す現状に言及し、それでもなお新生児期を撮影する考えや思いは何か、との次なる問いへと展開している。またハーフバースデーについては、ニューボーンフォトと同様に写真撮影が重要であり、加えてその写真がSNSなどで共有される点に注目して、『ひよこクラブ』の読者コーナーに掲載された写真が検討される。

武井謙悟「仏前式結婚式の実例調査」は、現代日本における結婚式の形式として、（キリスト）教会式や（神道）神前式と並べて紹介されることが多いにも関わらず、実施割合がきわめて低い「仏前式結婚式」の、貴重な実例調査が報告される。今回は、ホテルや結婚式場仏教系の大学で実施されるパターンではなく、寺院を会場とする2事例で、ひとつは寺院後継者である新郎がその寺院を会場として実施した事例、もうひとつは結婚式を実施する受け入れ体制が整っている寺院（長野市の善光寺大勧進）での事例で、いわば臨時と常時の事例となっている。臨時の事例では、同時期に修行していた仲間である同安居の

協力によって実施されたことが報告される。常時の事例では、結婚式担当の寺院僧侶とウェディングプランナーへのインタビューから、コロナ禍前のピーク時には年間120件、現在は年間50件ほどの実施で、現在はブライダル会社に専属で委託していること等々が報告される。

土居浩報告「近年における挙式会場のシェア推移」では、結婚式と葬儀式との比較検討する第一歩として、結婚式がどこで行なわれたのか、21世紀に入ってからからのシェア推移が検討される。既往研究では、戦後日本における長期間での変化か、2000年代（ゼロ年代）における変化についての検討があるが、2010年代以降の検討は見当たらない。その前提を踏まえ「ゼクシィ 結婚トレンド調査」に基づき、21世紀に入ってから結婚式（挙式）がどこで行なわれたかについて、結婚式場・ホテル・ゲストハウスの3種に絞り、加えて、既往研究が取り上げた首都圏だけでなく、比較のため東海四県が取り上げられ、シェアの推移が検討される。結果、首都圏では2010年代にホテルから結婚式場へとトップシェアが移る一方で、東海四県は結婚式場がトップシェアを維持し続けている。またゲストハウスのシェアも、首都圏と東海四県とで大いに相違があることが指摘される。

以上、冠婚班の初年度報告として、各報告の概要を示した。いずれもディスカッション・ペーパー的報告ではあるが、これまでの委託研究を踏まえつつ、さらに拡張する方向への展開が期待されるテーマ設定となっており、今後が期待される。